

都市の記憶

Photo Essay シリーズ

重要文化財 **中央合同庁舎第6号館赤れんが棟** (旧司法省庁舎)



近代国家「日本」の飛翔

「官庁集中計画」の壮図

東京・霞ヶ関は、国会議事堂をはじめ多数の政府機関が集中するわが国の中枢である。合同庁舎として建設された高層ビル群の中、あたかも木漏れ日を浴びて翼を休めている巨鳥のように、威厳に満ちた赤煉瓦建築が建っている。

現在、中央合同庁舎第6号館として法務省が使用している「赤れんが棟」は、明治28年(1895)に旧司法省庁舎として竣工した。政府が西欧諸国との不平等条約改正・国会開設などの重要案件を抱えていた明治19年当時、内閣に設置された臨時建設局(初代総裁を外務大臣・井上馨が兼任)は、ドイツから著名な建築家ヘルマン・エンデとヴィルヘルム・ベックマンを招聘して、西洋建築による官庁集中計画の立案を委嘱した。

先に来日したベックマンによる当初の計画は、パリやウィーンの都市計画を参考に、現在の霞ヶ関、日比谷とその周辺一帯を西洋建築の庁舎を多数配置し、街区全体に放射状道路、広場、公園、記念碑などを整備する壮大なものだったという。しかし、ベックマンの帰国後にエンデがまとめた完成案は、政情の不穏や地盤などの立地条件を考慮して大幅に縮小されることになった(第一次計画案として残された司法省庁舎の透視図を見ると、実際に建てられたものより階数が1階多く、屋根周りの装飾もより豪華である)。

ともあれ、この設計案を基におよそ7年の歳月をかけて完成した司法省庁舎は、旧大審院(後、最高裁判所)や日本銀行本店本館の建物らと並んで、明治期を代表するわが国の建築作品として重要な位置を占めるものとなった。実施設計・工事監理を担当したのは、ドイツ留学でエンデに学んだ河合浩蔵である。

ネオ・バロック様式による堂々たる煉瓦積の外観は、当時のドイツ本国における同種建築を凌ぐ偉容を誇った。天然スレートで葺かれた屋根は多様なパターンで構成され、中央部と四隅部分が急勾配の鋭角を強調する。赤煉瓦の壁、白石の軒蛇腹、黒いスレートによる直線的な構成。華麗さを際立たせるドーマー窓・棟飾りなどの装飾的な要素。そこには、近代国家としての飛翔を期する日本という国家の意気込みと、それを正面から受け止め、実現しようとする建築家の理想が共に込められていた。

旧司法大臣公邸を併設する内部は、煉瓦壁を木材と漆喰で被う落ち着いたたたずまいで、これもまた和魂洋才を尊しとした「明治」という時代を強く体現している。



赤レンガ棟外観全景



エンデ&ベックマン第一次計画案透視図(日本建築学会蔵)



着工前後から竣工まで		歴史と世相
明治21年 (1888)	・10月 旧司法省庁舎着工 ・11~12月 外相・大隈重信が条約改正案を各国公使に手交する。	
明治23年 (1890)	・7月 第1回衆議院・貴族院議員選挙が実施される。 ・11月 凌雲閣(浅草十二階)、帝国ホテルが開業する。	
明治27年 (1894)	・8月 日清戦争が始まる。	
明治28年 (1895)	・4月 日清講和条約(下関条約)締結。独・仏・露による三国干渉が起こる。 ・12月 旧司法省庁舎竣工	

